

博士論文（要約）

論文題目 中世和歌と絵画・空間の相関

氏名 石井 悠加

目次

凡例	⋮	1	頁
序章	⋮		
第一部 絵巻『慕帰絵』の和歌			
第一章 『慕帰絵』の制作意図——和歌と絵の役割について——	⋮	8	頁
第二章 『慕帰絵』の和歌——慈円詠との出会い——	⋮	20	頁
第三章 文明年間の『慕帰絵』補作について	⋮	36	頁
第二部 和歌と絵巻・絵画の相関			
第一章 『拾遺古徳伝絵』の和歌			
——真宗絵巻における法然の日吉社頭詠——	⋮	40	頁
第二章 『遊行上人縁起絵』の和歌——白河関の一遍詠——	⋮	54	頁
第三章 『道成寺縁起』の和歌	⋮	65	頁
第四章 世阿弥の佐渡配流と『金鳥書』	⋮	75	頁
第三部 和歌と離宮・別業の相関			
第一章 北山殿における詠歌史	⋮	90	頁
第二章 鳥羽殿における詠歌史	⋮	105	頁
付・年表			
第三章 亀山殿における詠歌史	⋮	122	頁
第四章 白河殿における詠歌史	⋮	148	頁
終章	⋮	163	頁
初出一覧			
あとがき			

本文

本論文について、次の二点の理由につき全文を公表することができません。

(一) 本論文第二部第二章六六頁に掲載した次の各資料の図版写真について、インターネット公表に対する原蔵者・著作権者からの許諾が得られていません。

『遊行上人縁起絵』金台寺本

『遊行上人縁起絵』専称寺本

『遊行上人縁起絵』真光寺本

『遊行上人縁起絵』金蓮寺本

『遊行上人縁起絵』清浄光寺甲本

『遊行上人縁起絵』清浄光寺乙本

(二) 本論文の全部は、学位授与日から五年以内に単行本等の形で出版の予定です。

参考文献一覧

各章で引用した参考文献を左に掲載順に挙げる。

序章

- 小川剛生『中世和歌史の研究―撰歌と歌人社会―』第五章「為右の最期―二条家の断絶と冷泉家の逼塞」(塙書房、平二九)
- 梅津次郎『絵巻物叢考』(中央公論美術出版、昭四三。初出昭三五)
- 梅津次郎「絵と絵詞」(『文学』四二、昭四九・三)
- 梅津次郎監修『角川絵巻物総覧』(角川書店、平七)
- 徳田和夫『絵語りと物語り』第四章「絵巻の物語学」(平凡社、平二)
- 大村拓生『中世京都首都論』第二部第一章(吉川弘文館、平一八。初出平一二ほか)
- 美川圭『院政』第四章(中公新書、平一八)
- 田島公「中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷―蔵書目録の紹介と収蔵品の行方―」同『禁裏・公家文庫研究 第二輯』(思文閣、平一八)

第一部 絵巻『慕帰絵』の和歌

第一章 『慕帰絵』の制作意図―和歌と絵の役割について―

- 中沢見明『史上の親鸞』(文献書院、大一一)
- 千葉乗隆「覚如―『慕帰絵』とその作者―」(『千葉乗隆著作集第一巻 親鸞・覚如・蓮如』法蔵館、平一三、初出昭五五)
- 籠谷眞知子『慕帰絵』にみる文芸と習俗」(『真宗文化史の研究―本願寺の芸能論考―』京都女子大学、平七、初出昭六〇)
- 佐々木孝浩「家集としての『慕帰絵詞』―巻五第三段の歌会場面存在の意味について―」(石川透編『中世の物語と絵画』〈中世文学と隣接諸学9〉竹林舎、平二五)
- 本願寺史料研究所編『増補改訂本願寺史第一巻』(本願寺出版社、平二二)
- 重松明久『人物叢書新装版 覚如』(吉川弘文館、昭六二新版)
- 東京国立博物館編『西本願寺展―御影堂平成大修事業記念―』(NHK NHKプロモーション、平一五)
- 仰誓撰『校補真宗法要典拠』(安政三年刊)
- 真宗史料刊行会編『絵巻と絵詞』〈大系真宗史料特別巻〉(法蔵館、平一九)
- 宮崎円遵「最須敬重絵詞とその指図書」(『善信聖人絵 慕帰絵』〈新修日本絵巻物全集20〉角川書店、昭五三)
- 妻木直良編『真宗全書 第68巻』(国書刊行会、昭五一)

第二章 『慕帰絵』の和歌―慈母詠への出かこ―

籠谷眞知子「『慕帰絵』にみる文芸と習俗」(『真宗文化史の研究―本願寺の芸能論考―』京都女子大学、平七、初出昭六〇)

岡崎真紀子「覚如の歌、円空の歌」(阿部泰郎・錦仁編『聖なる声―和歌にひそむ力』三弥井書店、平二三)

山田雅教「初期本願寺における公家との交流」(『仏教史学研究』三八―二、平七・一二)
佐々木孝浩「家集としての『慕帰絵詞』―巻五第三段の歌会場面存在の意味について―」(石川透編『中世の物語と絵画』〈中世文学と隣接諸学9〉竹林舎、平二五)

松原茂「慕帰絵と筆者たち」(東京国立博物館編『西本願寺展―御影堂平成大修復事業記念―』NHK NHKプロモーション、平一五)

「本願寺法宝物 修理報告書」(宗教法人本願寺、平二七)

中沢見明『史上の親鸞』(文献書院、六一)

源豊宗「慕帰絵雑考」(初出昭五三、『源豊宗著作集 日本美術史究論5 室町』思文閣出版、昭五四)

千葉乗隆「覚如―『慕帰絵』とその作者」(『千葉乗隆著作集1 親鸞・覚如・蓮如』法蔵館、平成一三、初出昭五五)

山田雅教「初期本願寺教団における顕密諸宗との交流―覚如と存覚の修学を基にして―」(『佛教史研究』二七、平二・三)

多賀宗隼『校本拾玉集』(吉川弘文館、昭四六)

石川一『慈円和歌論考』(笠間書院、平一〇)

山本一『慈円の和歌と思想』(和泉書院、平一一)

石川一・山本一『拾玉集(下)』(和歌文学大系59) 解題(明治書院、平二三)

石川一『拾玉集本文整定稿』(勉誠出版、平一七)

山田昭全『講会の文学』(山田昭全著作集1)第二章(おうふう、平二四、初出昭三一・三)

第三章 文明年間の『慕帰絵』補作について

青木龍丸「覚如上人の歌」(『龍谷教学』二、昭四二・六)

佐々木孝浩「家集としての『慕帰絵詞』―巻五第三段の歌会場面存在の意味について―」(石川透編『中世の物語と絵画』〈中世文学と隣接諸学9〉竹林舎・平二五)

第二部 和歌と絵巻・絵画の相関

第一章 『拾遺古徳伝絵』の和歌―真宗絵巻における法然の日吉社頭詠―

小山正文『『拾遺古徳伝絵』の成立と展開』(『親鸞と真宗絵伝』法蔵館、平一一、初出昭六三)

小山正文「弘願本『法然聖人絵』」(『親鸞と真宗絵伝』法蔵館、平一一、初出昭六三)

真宗史料刊行会編『大系真宗史料特別巻 絵巻と絵詞』(法蔵館、平一八) 解題

東京国立博物館編『法然上人八百回忌・親鸞聖人七百五十回忌特別展 法然と親鸞 ゆかり

- の名宝』(平二三、NHKプロモーションズ)
- 法然上人絵伝刊行会編『堂本家所蔵 限定複製版 重文 法然上人絵伝(弘願本全三巻)』(大法輪閣、昭六〇)
- 中井真孝『法然上人絵伝の研究』(思文閣出版、平二五)
- 小山正文「弘願本『法然聖人絵』」(『親鸞と真宗絵伝』法蔵館、平一一、初出昭六三)
- 井川定慶『法然上人絵伝の研究』(法然上人伝全集刊行会、昭三六)
- 黒田俊雄『神国思想と専修念仏』(黒田俊雄著作集4) (法蔵館、平七)
- 鎌田茂雄・田中久夫校注『鎌倉旧仏教』(日本思想大系15) (岩波書店、昭四六)
- 真宗史料刊行会編『親鸞と吉水教団』(大系真宗史料 文書記録編1) (法蔵館、平二七)
- 京都国立博物館編『法然上人八百回忌特別展覧会 法然 生涯と美術』(NHKほか、平二三)
- 小島恵昭「神祇不拝と汚穢不浄」(同朋大学仏教文化研究所編『誰も書かなかった親鸞―伝絵の真実』法蔵館、平二二)
- 大隅和雄校注『中世神道論』(日本思想大系19) (岩波書店、昭五二)
- 市川浩史「権社と実社―存覚の神祇」(『群馬県立女子大学紀要』三一、平二二・二二)
- 塩谷菊美『語られた親鸞』(法蔵館、平二三)
- 宮崎円遵「諸神本懐集の底本の問題」(同『真宗書誌学の研究』永田文昌堂、昭六三、初出昭一八)
- 浅井了宗「浄土教に於ける神仏交渉發達論―広疑瑞決集と諸神本懐集に就て―」(『宗学院論輯』三六、昭五一・三)
- ニールス・グウルベルク『貞慶の春日信仰における「春日御本地尺」の位置―金沢文庫所蔵貞慶関係資料研究覚書1―』(『金沢文庫研究』二九五、平七・九)
- 近本謙介『春日権現験記絵』成立と解脱房貞慶』(『中世文学』四三、平一〇・五)
- 近本謙介『春日権現験記絵』と貞慶―『春日権現験記絵』所収貞慶話の注釈的考察―』(神戸説話研究会編『春日権現験記絵注解』和泉書院、平一七)
- 奈良国立博物館編『解脱上人貞慶 鎌倉仏教の本流 御遠忌800年記念特別展』(奈良国立博物館ほか、平二四)
- 小松茂美『山王靈験記』の盛行」(同編『山王靈験記 地蔵菩薩靈験記』(続日本絵巻大成12) 中央公論社、昭五九)
- 龍谷大学仏教文化研究所編『存覚上人一期記 存覚上人袖日記』(龍谷大学善本叢書3) (同朋舎出版、昭五七)
- 宮崎円遵「付載 親鸞と和歌」(『宮崎円遵著作集6』思文閣出版、昭六三、初出昭三八)
- 土井順一『佛教と芸能 親鸞聖人伝・妙好人伝・文楽』第一編「古伝 親鸞の和歌」(永田文昌堂、平一五)
- 籠谷眞知子『慕帰絵』にみる文芸と習俗』(『真宗文化史の研究―本願寺の芸能論考―』京都女子大学、平七、初出昭六〇)

第二章 『遊行上人縁起絵』の和歌―白河関の一遍詠―

宮次男「遊行上人縁起絵の成立と諸本をめぐって」(宮次男・角川源義編『遊行上人縁起絵』
〈新修日本絵巻物全集26〉角川書店、昭五四)

谷口耕生「総論 光明寺本遊行上人絵に関する覚書」(『特別展 重要文化財 光明寺本 遊行上人絵』最上義光歴史館、平二五)

森田昭二「心の奥の終しなれば」(『白珠』四二巻一号、昭六二・一)

長島尚道「一遍の和歌に関する一考察―一遍神格説を中心に―」(『時宗教学年報』一七、平元・三)

田野慎二「和歌を柱に書きつけるとき―「題壁詩」の影響と柱信仰とに注目して」(『人間研究論輯』一、平一三・一二)

砂川博『中世遊行聖の凶像学』第五章(岩田書院、平一一、初出平七)

岡見正雄「説話・物語上の西行について―一つの解釈―」(『室町文学の世界 面白の花の都や』(岩波書店、平八、初出昭三三))

柏崎光政「一遍知真の詠歌の特質―主に西行とのかかわりを通して―」(『明治大学日本文学』七、昭五一・一〇)

栗田勇「西行から一遍へ」(『波』一六巻四号、昭五七・四)

山口眞琴『西行説話文学論』第二部第三章『西行物語』の構造的再編と時衆」(笠間書院、平二一、初出平四)

小井川理「遊行の旅路への憧憬」(遊行寺宝物館・神奈川県立歴史博物館・神奈川県立金沢文庫編『国宝 一遍聖繪』遊行寺宝物館、平二七)

伊藤嘉夫『西行物語』のたねとしくみ」(『跡見学園国語科紀要』一二、昭九・三)

三角洋一『西行物語』―絵巻との関わりで」(『国文学解釈と教材の研究』三〇巻四号、昭六〇・四)

木下華子『西行物語』構想の方法―名所歌との関連をめぐって」(『國語と國文學』九五巻一一号、平三〇・一一)

阿部泰郎「旅する詩人」としての西行 EATS リスボン大会フォーラム記録」(『西行学』九、平三〇・一〇)

若林晴子「絵巻物のなかの一遍―『一遍聖繪』に見る一遍の遊行―」(今井雅晴編『遊行の捨聖 一遍』吉川弘文館、平一六)

第三章 『道成寺縁起』の和歌

森正人「科白と絵解と物語―『道成寺縁起絵巻』をめぐって―」(『文学』五二巻四号、昭五九・四)

小松茂美編『桑実寺縁起 道成寺縁起』〈続日本の絵巻24〉(中央公論社、平四)
特別展図録『道成寺と日高川―道成寺縁起と流域の宗教文化―』(和歌山県立博物館、平二九) 解説(大河内智之氏筆)
井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華験記』(日本思想大系7)(岩波書店、昭四九)
山田孝雄他校注『今昔物語集 三』(日本古典文学大系24)(岩波書店、昭三六)
大嶋建彦校注『御伽草子集』(日本古典文学全集36)(小学館、昭五二)
鈴木一雄『源氏物語の和歌―贈答歌における一問題―』(『王朝女流日記論考』至文堂、平五、初出昭四三)
高木和子『女から詠む和歌 源氏物語の贈答歌』第三章「女から歌を詠むのは異例か―和泉式部日記の贈答歌―」(青簡舎、平二〇、初出平一六)

第四章 世阿弥の佐渡配流と『金島書』

竹本幹夫「世阿弥の生涯 足利義教時代」(『別冊太陽 世阿弥』平凡社、平二二)
今谷明「世阿弥佐渡配流の背景について」(『室町時代政治史論』塙書房、平一二。初出平一〇)
黒田正男『世阿弥能楽論の研究』(桜楓社、昭五四)
吉田東伍校注『能楽古典世阿弥十六部集』(能楽会、明四二)
村井康彦「佐渡の世阿弥―『金島書』の一考察―」(『芸能史研究』一〇、昭四〇・七)
表章「世阿弥と禅竹の伝書」(『世阿弥 禅竹』(日本思想大系24) 岩波書店、昭四九)
佐藤和道編「世阿弥発見一〇〇年―吉田東伍と能楽研究の歩み―」(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館二〇〇九年図録)
市古貞次編『高野本平家物語 東京大学国語研究室蔵』(笠間書院、昭四八・昭四九)
櫻井陽子「世阿弥の時代の平家物語」(『中世文学』六〇、平二七・六)
大津雄一ほか編『平家物語大事典』(東京書籍、平二二)
石井倫子「世阿弥―都から佐渡へ」(『国文学解釈と鑑賞』平成一六年一月号)
小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎校注『謡曲集二』(日本古典文学全集34)(小学館、昭五〇)
伊藤正義校注『謡曲集 中』(新潮日本古典集成)(新潮社、昭六一)
小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎校注『謡曲集 一』(日本古典文学全集33)(小学館、昭四八)
冷泉家時雨亭文庫編『源家長日記・いはでしのぶ・撰集抄』(冷泉家時雨亭叢書43) 所収
「花鳥風月・瀟湘八景和歌」解題(三角洋一氏執筆)
久保田淳『訳注 藤原定家全歌集 下』(河出書房新社、昭六一)
堀川貴司『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』(臨川書店、平一四)
根津美術館・徳川美術館編『東山御物―「雑華室印」に関する新史料を中心に』(根津美術館、昭五一)

堀川貴司『五山文学研究 資料と論考』第三部(笠間書院、平二三)
能勢朝次『世阿弥十六部集評釈 下』(岩波書店、昭一九。増補昭二四)
佐竹昭広ほか編『江談抄 中外抄 富家語』(新日本古典文学大系32)(岩波書店、平九)
伊藤正義校注『謡曲集 下』(新潮日本古典集成)(新潮社、昭六三)
落合博志「世阿弥伝書考証二題(一)『花鏡』と清家系論語抄(二)『金鳥書』における虚構の問題」(『能研究と評論』一七、平一・一二)
池田重校・解説『宗砌連歌論集』(古典文庫、昭二九)
横山重・松本隆信編『室町時代物語大成13 みなくわか』(角川書店、昭六〇)
東京大学史料編纂所編『石清水文書5』(大日本古文書 家わけ4)(東京大学出版会、大三。復刻昭四五)
新潟県神職会佐渡支部編『佐渡神社誌』(新潟県神職会佐渡支部、大正一五)
岩佐美代子「京極為兼の和歌・八景歌考」(『改訂増補版 京極派和歌の研究』笠間書院、平一九。初版昭六二)
石井倫子「世阿弥―都から佐渡へ」(『国文学解釈と鑑賞』六九巻一―号、平一六・一一)

第三部 和歌と離宮・別業の相関

第一章 北山殿における詠歌史

久保田淳『藤原家隆集とその研究』(三弥井書店、昭四三)
宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記』(宮内庁書陵部、平二)
石澤一志「伏見院と永福門院の贈答歌―新出歌の紹介―」(『国文鶴見』三四、平一一・一二)
龍肅『鎌倉時代(抄録版)』(文藝春秋、平二六。初版三二)
小川剛生『後光明照院関白記(道平公記)』(解題・翻刻・人名索引)、『調査研究報告』二二、平一三・一一)
森茂暁『増補改訂 南北朝期公武関係史の研究』(思文閣出版、平二〇。初版昭五九)
岩佐美代子『改訂新装版 京極派歌人の研究』(笠間書院、平一九。初版昭四九)
冷泉家時雨亭文庫編『中世百首歌・七夕御会和歌懐紙』(冷泉家時雨亭叢書34)(朝日新聞社、平八)

第二章 鳥羽殿における詠歌史 付・年表

蘆田伊人編纂『御料地史稿』(帝室林野局、昭一一)
鈴木久男「鳥羽離宮庭園から見た鳥羽上皇の浄土観」(白幡洋三郎編『作庭記』と日本の庭園』思文閣出版、平二六)
豊田裕章「復元・水無瀬離宮 後鳥羽上皇の庭園都市」(錦仁ほか編『都市歴史総覧』、笠間書院、平二三)
千本英史「水閣の眺望―鳥羽離宮をめぐる―」(後藤祥子編『文学空間としての平安京』勉誠出版、平六)

佐藤恒雄『藤原為家研究』（笠間書院、平二〇）
宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記』（明治書院、平二）
網野善彦「西園寺家とその所領」『網野善彦著作集3』岩波書店、平二〇、初出平四）
岩佐美代子『あめつちの心』（笠間書院、昭五四）
岩佐美代子「伏見院の春の歌―正安の政変をめぐる―」（『改訂増補版 京極派和歌の研究』笠間書院、平一九。初出昭四八・四）

第三章 亀山殿における詠歌史

大村拓生「嵯峨と大堰川交通」『中世京都首都論』（吉川弘文館、平一八）
山田邦和『日本中世の首都と王権都市―京都・嵯峨・福原―』（平安京・京都研究叢書2）（文理閣、平二四）
原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」（浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座 蓮如第四卷』平凡社、平九）
川上貢「亀山殿の考察」『日本中世住宅の研究（新訂）』（中央公論美術出版、平一四）
今井明「後嵯峨院の志向―その大井河行幸再興発想歌を中心に―」（『中古文学論攷』二、昭五六・一一）
黄一丁「亀の和歌に見られる「蓬莱仙境」・「盲亀浮木」などの故事について」（森田貴之ら編『日本人と中国故事 変奏する知の世界』（アジア遊学223）勉誠出版、平三〇・九）
佐藤恒雄編『藤原為家全歌集』（風間書房、平一四）
角田文衛「新発見 藤原定家の小倉山荘」（『国文学』二七卷一二号、昭五七・九）
西尾光一・小林保治校注『古今著聞集 上』（新潮日本古典集成）（新潮社、昭五八）
弓削繁校注『六代勝事記・五代帝王物語』（中世の文学第1期26）（三弥井書店、平一一）
井上宗雄校注訳『増鏡（中）』（講談社学術文庫、昭五八）
佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』（新日本古典文学大系39）（岩波書店、平元）
野間光辰編『山城名勝志』乾（新修京都叢書13）（臨川書店、昭四三）
三好千春「遊義門院始子内親王の立后意義とその社会的役割」（『日本史研究』五四一、平一九・九）
小川剛生『拾遺現藻和歌集 本文と研究』（三弥井書店、平一七）
中井裕子「世良親王遺領と臨川寺の創建」（原田正俊編『天龍寺文書の研究』思文閣出版、平二三）
和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』「欣子内親王」項（丹下暖子氏執筆担当）（古典ライブラリー、平二六）
本中眞「亀山殿庭園における眺望行為」（『造園雑誌』四七巻五号、昭五八）
安田徳子『中世歌人研究』（和泉書院、平一〇）
久保木秀夫「伝園基氏筆『後嵯峨院御集』断簡」（『汲古』六八、平二七・一一）
小林強「後嵯峨院の詠作活動に関する基礎的考察」（『中世文藝論稿』一六、平五・三）

蘆田伊人編纂『御料地史稿』（帝室林野局、昭一一）

小川剛生「二条良基と蹴鞠―『衣かづきの日記』を中心に―」（『室町時代研究』一、平一四・一一）

新家裕子「小倉公雄年譜」（『立教大学日本文学』五四、昭六〇・七）

石井倫子『風流能の時代 金春禅鳳とその周辺』（東京大学出版会、平一〇）

小山弘志ほか校注訳『謡曲集 一』（日本古典文学全集33）（小学館、昭四八）

第四章 白河殿における詠歌史

林屋辰三郎『古典文化の創造』「法勝寺の創建」（東京大学出版会、昭三九）

弓削繁校注『六代勝事記・五代帝王物語』（中世の文学第1期26）（三弥井書店、平一一）

井上満郎「院政期における新都市の開発―白河と鳥羽をめぐって―」（安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』吉川弘文館、平元）

井上満郎「王朝都市再現 京白河に四五万間」（『平家物語①』（新編日本古典文学全集45）月報、小学館、平六）

栗野秀穂「禅林寺」（『史蹟と古美術』麟祥院・壽聖院・蟠桃院号、昭七・九）

外山英策『室町時代庭園史』「夢窓国師と庭園」（昭九、岩波書店）

井上宗雄『鎌倉時代歌人伝の研究』第五章一「白河殿七百首の基礎的考察」（風間書房、初昭五八）

小林強「鎌倉中期主要散佚歌合・歌会小考（二）」（『中世文藝論稿』一四、平三・三）

築瀬一雄『俊恵研究』（築瀬一雄著作集1）第二章「歌林苑の研究」（加藤中道館、昭五二、初出昭一九）

中村文『後白河院時代歌人伝の研究』第十五章「歌が詠み出される場所―歌林苑序説―」（笠間書院、平一七。初出平六）

終章

阿部泰郎「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼」（『岩波講座東洋思想16 日本思想2』岩波書店、平元）

藤原重雄「(コラム) 蓮華王院宝蔵の「大嘗会御禊行幸絵」（サントリー美術館編『絵巻マニア列伝』（サントリー美術館、平一九）

竹居明男「鳥羽宝蔵納物覚書」（『国書逸文研究』二二、平一・一〇）

高橋一樹「中世成立期における王権の宝蔵とその歴史的 성격―蓮華王院宝蔵を中心に―」（小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世人のたからもの』（考古学と中世史研究8）高志書院、平二三）

増記隆介「正倉院から蓮華王院宝蔵へ―古代天皇をめぐる絵画世界」（同氏他編『古代国家と仏教美術 奈良・平安時代』（天皇の美術史1）吉川弘文館、平三〇）

小川剛生「宮内庁書陵部蔵『叙位儀次第』（管見記第五軸）紙背文書について」（『禁裏・公

- 家文庫研究 第二輯』思文閣、平一八)
- 田島公「中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷―蔵書目録の紹介と収蔵品の行方―」(『禁裏・公家文庫研究 第二輯』思文閣、平一八)
- 高岸輝『中世やまと絵史論』第一部第一章(吉川弘文館、令二。初出平二二)
- 小川剛生「姉小路基綱について―仮名日記作者として―」(『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』三一、平一七・二)
- 三島暁子『天皇・將軍・地下樂人の室町音楽史』第五章四節『延徳御八講記』の役割―真名記と仮名記』(思文閣出版、平二四。初出平一四)
- 佐多芳彦『賀茂祭絵詞』とその周辺』(『京都産業大学日本文化研究所紀要』一四、平二一・二二)
- 赤木ひと美「四条隆親に関する一考察―『とはずがたり』の背景として―」(『詞林』二四、平一〇・一〇)
- 三角洋一校注『とはずがたり たまきはる』(『新日本古典文学大系50』(岩波書店、平六)

論文内容要旨

序章

本論文は絵画・空間との相関という視点から中世和歌を捉えることを主旨とする。そのために和歌の本質の、ひいては中世の文化的領域の拡大の要因となった「王権」と「宗教」に注目する。この二つでは、継承されるべき権威や正統性を可視化する目的のためにさまざまな手段が試みられているが、本論は主に「絵巻の制作」「御所の創出」に注目してこれらの可視化の動向における和歌の介在の形態について論じる。

第一部 絵巻『慕帰絵』の和歌

第一章 『慕帰絵』の制作意図——和歌と絵の役割について——

本願寺三世覚如の観応二年（一三五一）の死の直後に制作された伝記絵巻『慕帰絵』（全一〇巻）に収載されている和歌を検証すると、四世善如に関連する詠歌が最も多く、当時はまだ稚児の姿であった善如は、立場の重要性を示すように覚如の側に頻繁に描かれている。また善如が覚如と直接関わる四つの場面では、彼が祖父覚如の後継者であり、深く心が結びつく存在であることが示されている。本絵巻は和歌と絵という二つの表現手段により、覚如の後継者の存在を示す意図を持つものなのである。

第二章 『慕帰絵』の和歌——慈円詠との出会い——

愛息を亡くした日野兼光の元へと慈円が贈った慰問の詠歌は尊円親王の編纂した慈円家集『拾玉集』に収められたが、後に尊円親王はその詠歌が載る「慈円和尚御記」を、同じく愛息を亡くした日野資明の元へ送っている。覚如二男從覚が「家集的」とも言われるほどの父の大量の贈答歌群を『慕帰絵』巻九第三段に収載した理由は、一門の出自である日野家のこの出来事に触発されたためである。

この贈答歌群の関連人物を検証すると、その多くが覚如の死の前後に亡くなった人々であることが分かる。『慕帰絵』は一門を支えた人々の記憶を、世情混乱の中で急激な世代交代を迎えることになった子孫へ伝える役割をも担う絵巻であった。

第三章 文明年間の『慕帰絵』補作について

『慕帰絵』の巻一・巻七は足利將軍の召し上げにより紛失し、文明年間の八世蓮如の時に新たに補作されている。補作以前の詞書を伝えると考えられる蓮如書写本や本善寺本などによれば、もとの巻七第一段には勅撰集入集を願う覚如詠も収められていたはずである。しかし補作にはその一首はない。これは補作時に蓮如によって意図的に削除されたためと推測される。覚如は死後に勅撰歌人となっており、その願いが既に果たされたことがこの削除の要因かと考えられる。

第二部 和歌と絵巻・絵画の相関

第一章 『拾遺古徳伝絵』の和歌——真宗絵巻における法然の白吉社頭詠——

法然門下における親鸞の位置を明確にする目的で親鸞伝絵とともに制作されたという真宗の法然伝絵巻『拾遺古徳伝』だが、他の法然伝にはない松山配流の折の詠歌場面など、親鸞の動向とは無関係な法然の詠歌場面が独自に設けられている。特に注目されるのは、少年時代の法然が出家を目前に日吉社頭で行われた歌会で和歌を詠む場面である。その和歌の表現は本地垂迹思想とも受け取れる上、画面には歌会の光景は描かれず、日吉社に参拝する法然の姿が描かれている。これは神祇不拝から権社崇拜へと転換していく一四世紀前半の真宗によって求められた法然像であり、南北朝期以降の真宗系法然伝で踏襲されるこの場面は、次第に明瞭な本地垂迹思想の表現へと変容していく。

第二章 『遊行上人縁起絵』の和歌——白河関の一遍詠——

時宗開祖の一遍の行状を描いた二つの絵巻『一遍聖絵』と『遊行上人縁起絵』は、どちらも白河の関で和歌を関所の柱に書きつける一遍を題材とした場面を持つ。その場面は白河関で和歌を詠んだ西行を想起させるが、その意図はそれぞれで異なり、前者は一遍が関屋明神に加護を願った場面、後者は制作者で一遍死後の教団を担った他阿真教が一遍とともに旅をし和歌を詠じた場面となっている。また前者は『西行物語絵巻』の白河関の場面と、その前後の雨宿り場面、藤原実方墓探訪場面を撰取したものと見られ、そして後者は正統な歌人の系譜に一遍を連ねようという意図をも持つことが、一遍の端正な容貌の描写から推測される。それは白河関では歌人は先人に敬意を評して身なりを正すべきだという説話に基づいた、歌人他阿真教による表現なのである。

第三章 『道成寺縁起』の和歌

道成寺の絵解きに用いられている絵巻『道成寺縁起』の内容は、『今昔物語集』などに同話を収めるが、先行文献とは異なり、僧への女の執着の念と女の愛を受け流す僧の心情が偽の贈答歌ともいふべき詠歌によって表現されている点に特徴がある。熊野権現の名の下に女を裏切るこの絵巻独自の表現には、女の蛇体への変化を必然のものとする効果がある。

また絵巻は逃げる僧と僧を追いつながら姿を変じていく女の間割り込むように「塩屋」（塩焼小屋）を描き込んでいるが、これもまた「塩屋の海人」が恋の苦しみを連想させるものであるという詠歌表現を利用したものである。

第四章 世阿弥の佐渡配流と『金島書』

將軍の勘気を蒙り佐渡へ流罪となった世阿弥は、その旅の過程と佐渡での見聞を詞章とした小謡集『金島書』を制作した。ここで世阿弥は都に伝わっていた京極為兼配流時の奇瑞伝承の舞台を佐渡の八幡宮に設定しているが、これは將軍足利義教の篤い八幡信仰を意識していることだろう。

『金島書』は古典の引用によって様々な流罪の古人を連想させるが、その端緒となるのが瀟湘八景のうちの「遠浦帰帆」の想起と白居易の詩句の引用である。ここで世阿弥は自身が謡の主体となり、これらの古典の中の水辺の老翁像と一体化する。そして源頭基の「配所の月」の引用により、舞台でかつて演じた作品の中の流謫の人々の境遇に今現実には置かれてい

るといふ世阿弥自身の感慨を、新たな作品へ結実させているのである。

第三部 和歌と離宮・別業の相関

第一章 北山殿における詠歌史

西園寺家が一三世紀前半に北郊に造営した北山殿における詠歌史の様相を、公経・実氏・実兼・永福門院鐘子・実俊までの所有期に分けて辿る。

北山殿の造営当初、周辺には大規模な桜の植樹が行われた。公経の死後も実氏・実兼期の西園寺家が天皇家と強固な姻戚関係を結ぶ中で、北山殿は行幸御幸の地となり、次第に北山の桜は御幸を迎えるために植えられた「みゆきを待つ桜」と記憶されるようになり、詠歌表現の中にその記憶が共有されるようになる。御幸の伝統が途絶えた後にも、永福門院鐘子詠や日野名子の日記、処刑された公宗遺児の実俊の詠進歌などの中にその記憶が留まっている。

第二章 鳥羽殿における詠歌史(付・年表)

白河院が一世紀末に南郊に造営した鳥羽殿は、院政期の政治と文化の最も重要な舞台である。その詠歌空間としての特徴を歴史・景観・権力関係を通して明らかにする。

一二世紀末から一三世紀初の争乱による荒廃を経ても、鳥羽殿は再興されて歴史と権力の象徴としての意義を保持した。しかし後嵯峨院期の再興の後、両統迭立期以降の鳥羽殿は荒廃の一途を辿る。その時に鳥羽殿が持っていた意義を再び想起させる役割を果たしたのが和歌である。亀山院は和歌で亀山殿が鳥羽殿に代わる空間であることを示し、伏見天皇は鳥羽殿への朝覲行幸を行い、白河・堀河両院以来の正当な鳥羽殿の所有者の系譜にあることを和歌に詠出している。

第三章 亀山殿における詠歌史

後嵯峨院が一三世紀半ばに西郊に造営した亀山殿では、既存の「亀山の桜」という神仙思想的な詠歌表現を実景として再現することを目的として、造営当初に吉野山から運ばれた大量の桜の植樹が行われている。この離宮には仏事空間、女院たちの居住空間、眺望・晴儀の空間などとしての役割があり、その役割がそこで詠まれた和歌にも影響している。後嵯峨院は亀山殿に対する所有意識をたびたび和歌に詠み、ここでの和歌は『続古今和歌集』賀部の中核となった。後嵯峨院の廷臣の中で一三世紀まで生きた小倉公雄は、後嵯峨院の文永二年九月の歌合の盛会での御製歌を強く記憶に留めて、この日への懐旧の念を晩年まで詠み続けた。南北朝期に入って亀山殿が離宮としての役目を終えた後にも後嵯峨院期に植樹された吉野の桜のイメージは謡曲〈嵐山〉へと継承されている。

第四章 白河殿における詠歌史

白河殿は一世紀後半に藤原頼通から白河院に献上された鴨川東の別業を前身とし、一三世紀後半に亀山院によって禅宗寺院(南禅院)に改修された。それ以前にも白河には貴族たちの別業があり、桜を訪ねて人々が散策する遊覧・風流の地であった。院政期の白河では歌林苑という新たな文芸圏も形成されている。そのため白河殿には人々が往来する開放さ

れた都市的空間という他の離宮にはない側面があったことがこの地を舞台とした説話や歌会、詠歌表現などに表われている。また白河では川底の砂の白さと川岸の桜が詠まれるが、この桜は栄華の地であり人々で賑わう白河と幽玄の地である吉野のイメージとを結ぶ架橋ともなっている。

終章

絵巻と仙洞離宮の関係を捉えることで、中世和歌と絵画・空間の相関性を示す。

後白河院が法住寺殿内の蓮華王院宝蔵に蒐集・秘蔵した絵巻のコレクションは権力の象徴であったことが知られる。ところがその後、後鳥羽院の水無瀬殿については四季の風景を御製歌とともに描いた絵巻が制作され、後嵯峨院の亀山殿については宸筆御八講の法会を描いた絵巻が制作されている。亀山院は「絵合」を企図したが、そのために調進されたのは、亀山院の威光が父院時代に遜色ないことを示すために後嵯峨院時代の行事を描いた絵巻であった。ここには絵巻を保管する離宮から離宮を記録する絵巻へという関係の変化が見える。

絵巻にはある時空の記憶を留め、保管し、再び放つ仕組みが求められる。その時に力を発揮するのが舞台としての離宮であり登場人物の肉声としての和歌であった。